

04

色調の異なる2歯の修復に
オムニクロマフローを用いた症例東京医科歯科大学
名誉教授

一般的に側切歯と犬歯とではその色調が異なり、その歯頸部の修復においては側切歯がA2とすれば、犬歯ではA3あるいはA3.5が選択される。本症例においても両歯のシェードは異なっている。術前の写真においても、ラバーダム装着前と後では、歯の乾燥により明度が上昇している。

う蝕は象牙質にまで進行しており歯頸部の病巣であるため、歯髄には比較的近接した症例である。しかしながら患者が62歳と比較的高齢であり歯髄は狭小化していること、カリエスリスクは高くなく比較的進行の遅い慢性的に形成された病巣であることにより、局所麻酔なしで、患者はう蝕除去時の痛みは全く感じる事がなく、う蝕象牙質外層の除去を完了した。色調適合性向上のため、エナメル質窩縁部全周にベベルを付与した。

患部の歯頸部表面は複雑な凹凸のある形状であり、窩洞周囲部へのレジンの溢出の処理が不完全になりやすいことを考慮して、エナメル質窩縁部のみリン酸エッチングを行い、2ステップのセルエッチング型の接着材を使用した。

窩洞の最深部でも深さは2mm弱であったので、填塞は一塊で行った。填塞直後は透明感が低く色調は適合していないが、写真撮影中の時間経過とともに透明感を増し、色調も徐々に変化した。光照射終了後には色調は非常によく適合していた。当日に研磨を行い修復を完了した。構造発色の特性上、材料自体の光透過性は高めに設定されているため、歯頸部の窩洞では窩底部の色調も反映されやすく、色調適合は得やすい症例であった。

3週後の再来院時、乾燥状態の違いにより修復歯の色調は修復直後と異なっているが、オムニクロマフローによる修復物は、優れた色調適合を呈していた。



図1 術前



図2 ラバーダム装着



図3 う蝕除去



図4 接着剤塗布



図5 オムニクロマフロー注入



図6 注入直後



図7 余剰部除去

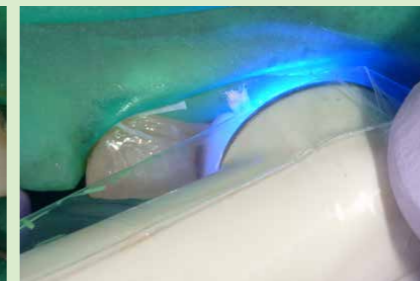


図8 光照射



図9 光重合終了



図10 修復直後(研磨なし)



図11 修復後(シェードガイド含む)



図12 3週間経過後